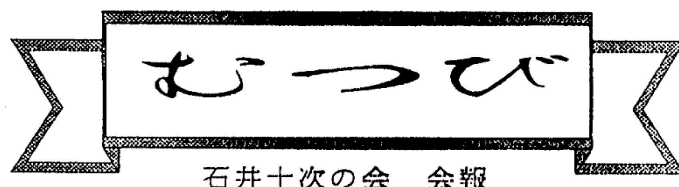


2025 年
(令和 7 年)
11 月 13 日



338 号

くろみず ちょうへい
黒水 長平 その 1

—石井十次を支えた先人たち—

むつび編集委員 石川 正樹

(1) 生い立ち

黒水長平は嘉永 5 年 (1852) 高鍋藩家老・秋月種節の二男として生まれた。長兄・水筑弦太郎は嘱望されながら幕末の動乱に巻き込まれ、伝馬町の獄につながれ 25 歳で病死。弟・秋月左都夫は外交官として活躍。末弟・鈴木馬左也は住友総理事として住友の近代化と多角化に貢献。4 人の兄弟は、後に「四哲」(4 人の優れた人物) と呼ばれた。長平は、4 人兄弟の中で最も地味で目立たなかった。藩校明倫堂で学んだあと、8 歳で黒水友右衛門 (100 石取り) の養子となる。13 歳のとき養父が亡くなり黒水家を継いだ。明治 11 年、31 歳にして私塾晩翠学舎で論語を学ぶ。このころ石井十次 (13 歳) も晩翠学舎で学んでいた。



黒水長平

(2) 先見の明ある父・秋月種節

明治 2 年 (1869)、高鍋藩は版籍奉還を行ったが、藩はまだ存在していた。藩がなくなるのは、明治 4 年の廃藩置県の時である。父・種節は執政として藩の指導的立場にあった。彼は先見性があり、武士の時代は終わると見て、武士も職業を身に着ける必要があると考えた。藩がなくなると武士は俸禄を失い、困窮する者が多かった。種節は実業に力を注ぎ、商店を経営。「最中屋」という屋号をつけ、酢、醤油、酒類の販売をはじめた。

種節が養蚕業を知ったのは、幕末の文久 2 年 (1862) のことである。江戸で参勤交代の勤めを終えた種節は中山道経由で帰国し、信州 (長野県) に立ち寄った。当時、信州では養蚕業が盛んだった。種節は養蚕農家を訪ね、養蚕技術を学び、桑の苗を分けてもらった。苗を大切に高鍋に持ち帰り、藩主・秋月種殷の許可を得て、大平寺地区に桑を植え、蚕室を建てた。ここを蚕丁場と名づけて藩内の希望者に養

蚕技術を教えた。このころ、十次の父・万吉も養蚕業に注目し、種節に師事し、蚕丁場で学んだ。馬場原の自宅に桑を植えて栽培を試みた。万吉は種節に次ぐ養蚕業の先駆者のひとりとなった。このことが後に茶臼原孤児院が養蚕業に参入する時に役立つことになる。

（３）種節、西郷軍に捕らわれ、獄中に死す

明治 10 年（1877）、西南戦争が勃発した。高鍋では西郷隆盛の人気は高く、多くの若者が西郷軍に味方して参戦し、78 人が田原坂で戦死。種節は参戦に反対した。明治という新時代に入った今、反乱軍である西郷軍に加担すべきでないと主張した。敗色濃厚となった西郷軍が宮崎から延岡に転戦したとき、西郷軍は種節を含む高鍋の参戦反对者 9 人を捕らえ、狭い^{せまい}^{いもみぐら}^{もみぐら}に押込めた。種節は^{いもみぐら}で、病気にかかり、不幸にも死亡した。享年 64。参戦に批判的であった二男・長平は、他の批判者 3 人とともに親戚預けとなった。明治 11 年、西南戦争は西郷軍の敗戦で終了したが、高鍋は荒廃した。「四哲」の父・種節は、西南戦争の犠牲となったのである。

（４）長平、父の殖産の志を継ぐ

黒水長平は、早くから父・種節の殖産の志を承け、殖産の道に進んだ。明治 2 年、自ら桑畑 2 反歩を栽培し、養蚕に着手。西南戦争が終わった明治 11 年には、晩翠学舎で 5 ケ月間学んだ。そのあと、大分県蚕業^{さんぎょう}原社^{げんしゃ}に行^いって養蚕業の実態を調査。長平は養蚕業を経験だけに頼らず、科学的に経営しようとした。桑の育て方を研究し、桑の種類によって育ちがちがうことを知った。蚕が食べる桑の葉の最適な柔らかさを把握し、収穫の時期を研究。桑の増やし方も工夫。蚕の卵（蚕種^{さんしゅ}という）を育て、蚕に成長させ、繭^{まゆ}を作らせる過程で、最良の成育方法を研究した。同志・平林忠恕^{ちゅうじょ}、内野重孝^{うち の じげたか}らと共に政府に働きかけ、士族授産金（士族の自立のための補助金）1 万円を獲得した。これを元手に製糸場（繭から生糸を紡ぐ工場）を建設し、平林忠恕を頭取に推して事業に当たった。養蚕の先進地を視察し、島根県の風穴^{ふうけつ}貯蔵^{ちようぞう}による蚕種の製法を学び養蚕農家に普及させた。

（５）長平、キリスト教徒となる

新島襄^{にいじまじょう}がキリスト教伝道のため宮崎県を訪れたのは明治 12 年である。同志社出身の小崎弘道^{こさきひろみち}を伴ない、高鍋への伝導には小崎を行かせた。小崎は秋月左都夫邸で伝導を行^{おぎわら}う。萩原百々平^{ど べい}と黒水長平は伝導会に参加した。長平はキリスト教に入信し、敬虔なクリスチャンとなった。石井十次とも教会で親しく交際した。

（以下、次号）

石井記念友愛社の福祉施設を訪ねて⑤ ～幼保連携型認定こども園 石井記念のゆり幼児園

編集委員 西村さと子(高原町)

石井記念のゆり幼児園の子ども達がいきいきと活動する日ごろの様子は、石井記念友愛社10の保育園の園だより「のゆり」で紹介されています。

のゆり幼児園は、昭和33年5月に開設され、令和2年4月からは幼保連携型認定こども園として、友愛社敷地の東に建てられました。その場所は歴史的背景が深く、「ゆうあい通信 393 号(2024 年 12 月)」で児嶋草次郎理事長が詳しく記述されていました。



田中 等 作 「いのち・ふく

令和7年9月1日現在、52名の園児が在園しています。0歳児は^{じんあい}仁愛組、1歳児は^{そうあい}相愛組、2歳児は^{そうしん}相信組、3歳児は^{てんめい}天命組、4歳児は^{おすずやま}尾鈴山組、5歳児は^{たいへいよう}太平洋組と分けられ、18名の職員が地域の良さを取り入れながら温かく、ひとり一人に自信を持たせる教育・保育を実践しています。

子ども達は、毎年、竹の皮を拾ってきて「あくまき」をつくっています。また、今年は、梅ちぎりができなかったなので、地域の方から梅をいただいて梅干づくりにも挑戦したそうです。

3月には、木城町の高齢者が会員である「オレンジカフェ」で交流を深めたことが新聞で紹介されました。園児が歌を披露したり、手作りのプレゼントを贈ったりしました。肩をマッサージする時間もあり会話が弾み、「子どもたちと触れ合うことができて楽しかった。」と、参加者に好評だったそうです。近くにある「石井記念ひかり保育園」や「石井記念やまばと保育園」の子どもたちと田植えや稲刈りを一緒にします。年長児は、3園の交流として3～4キロメートル歩いてこれらの園へ訪れて、交歓会も実施しているそうです。

羊(去年までは、園で飼育していた)の毛を手洗いしたり染色をしたりして、いろいろな作品や身近に使える物を作り展示されています。のゆり幼児園の卒園児は、みどりの杜木城学園(木城町の義務教育学校)、茶臼原小学校、近隣の小学校へ入学します。卒園後も、心豊かでのびのびと学校生活を送る子ども達は、のゆり幼児園での素晴らしい出会いや豊かな体験が礎になっていると感じました。

展示された園児の作



標題の研修旅行に「石井十次の会」枠で参加させていただいた。

9月29日～10月1日までの3日間。

往路車中で児嶋草次郎理事長から友愛社職員に3つの課題が提示された。

それならばと自分なりの課題を設定することとした。

- 1 なぜ十次は支援熱き岡山の地を断ち切り茶臼原大地に理想郷を
- 2 児嶋理事長と友愛社職員の関係性を覗き見したい
- 3 むつび編集委員長としての役割を現地で果たしたい

1について・・・次回12月号3頁にて記すこととしたい。

2について

関係性を覗き見なんてゲスっぽいのだが千載一遇ではある。

一日目の夜 合同懇親会で理事長と真向いの席というチャンス。

職員の名前を全部覚えているわけではないとのことだが、盛り上がるに連れて若い職員が理事長を取り囲む。そして熱く仕事の悩みややりがいを訴える姿が微笑ましい。

そうなのだ。理事長から名前を覚えてもらっているとか、職場が理事長の場所から離れた場所であるとかが関係性を左右するものではない。

大切なのは、石井十次の志を正しく継承・発展させようと日夜工夫努力している児嶋草次郎理事長の姿や魂を職員の皆様が折に触れて理解に努めること。

そのことこそが関係性をよくしていくのだと確信をする3日間。

友愛社職員の皆様 がんばれ!!

3について

夏季セミナー懇親会でたまたま同席だった岡山市・室賀康史氏と再会できた。約束していたわけではない。

が、最初の研修地「岡山孤児院発祥の地」で石井十次に学ぶ会の一員としてお待ちいただいていた。再会の固い握手をしながら次年度7月号巻頭原稿を依頼。同行の橋田和実会長もまったく同様の考え方であり二人しての猛アタックに快諾をいただいた。

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】山口 智子 日高 敬子

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【熊本県】嶋田 栄子 【宮崎市】永友 昌子 山口 昇 河口 和 野崎 順子
【都城市】天水 浩毅 【門川町】杉尾 和子 【三股町】宮内 浩二郎

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

〒884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1

社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-juujinokai@kijo.jp

編集後記

●巻頭執筆は我ら編集委員の石川正樹重鎮。

本年度中には【石井十次を支えた先人たち～続編】を発刊予定。その中にも掲載される黒水長平。「四哲」と呼ばれながら「大隠は市に隠るる」は胸打つ。「和光同塵」と同意語であり市井に溶け込み悠然と暮らしている長平が浮かび上がる。

そして重鎮の筆力にも圧倒される。

編集委員長 竹之下 悟